

七色に輝く



文：小原麻由美
絵：小島加奈子

錦秋の森に細やかな雨が降ったのか、美しい濡れ落ち葉が地面に張りついでいます。丸太で作ったごちんまりとした家に、初老の男が独りで住んでいました。「またこんな時間に目が覚めてしまった」男は目をショボショボさせながら、奥さんの仏壇に手をあわせました。「行ってきます」男は気急ぎに玄關のドアを開け、静かな森の散歩道を歩き始めました。夜明け前の空は、ほの暗く、頬に当たる空気はひんやりとしています。

で、男の足が止まりました。あたり一面に霧がかかって、道が見えません。(毎日二人で歩いていた道を、間違えるはずがないんだが……ん?) べっこう飴のような甘い香りが漂ってきます。男は誘われるように、香りのする方へと進んで行きました。歩きつらいデコボコ道には、露の玉を抱えた草の葉が茂っています。男は立ち込める霧を両手でかき分けながら、もう少し奥まで進んでいきました。「なんだ、ただの岩山か……」ほんやりと見える岩山に背を向けようとしたとき、男の目の前をスーッと風が通り抜け、霧が一瞬だけ切れました。岩山に見えたのは、幹の真ん中が腐って、ぼつかりと穴が空いている巨樹でした。株立ちといって、根元近くの株のところで何本もの枝が大きく分かれて伸びています。「……カツラの木だったのか」以前、木造加工の会社に勤めていた男には、木や葉がどんなに色や形を変えたとしても、その種類がすぐにわかりました。「木肌はホロボロ、カサカサだ。これも……、これも、傷だらけじゃないか」男は老木にそっと手を当てて、幹のまわりをヨロヨロと歩き始めました。



「こんなに老いて醜くなって、誰にも見つけてもらえない暗い場所、ずっと独りで生きているんだよな……おまえも」男は頬を緩めて、愛おしそうに幹をなでました。と、そのとき。「あっ！」男は倒木に足を取られて、尻もちを付きま

した。「いたたた……ん？」お尻の下を見て、男は驚きました。「地面がフカフカで、痛くないぞ」湿った落ち葉が腐って柔らかくなり、クツション代わりになってくれたのです。男は立ち上がりたとき、幹の下の方にウロを見つけた。近くへ寄って、こっそり中を覗き込みました。「ドングリ……」というものは、小さな動物が住んでいるかもしれないと想像して、男は小さな笑みをこぼしました。それから……。ほんの数分たったでしょうか。男はカツラの老木にもたれかかって安心した面持ちで眠りに落ちました。かすかに鳥の鳴き声が聞こえて、男は目

を覚めました。立ち込めていた霧が天に吸い込まれるように消え、涼風が木立の間を抜けていきます。光芒が、男を優しく包み込みました。「この木は、カツラだけじゃないぞ！」明るく照らされたその場所には、老木の今の姿がありました。幹や枝の傷ついた部分から、別の種類の若木が生えていたのです。「これは……スギ。それから、ケヤキ。こっちはイロハモミジだ。まだあるぞ、フジの木、カヤ、カエデも生えている」男は興奮して、若木の名前を呼びました。「天から光が差し込んでいるんじゃない。この木たちが光を放っているのか……」男は七色に輝く老木と若木たちを、優しくいまなざしで見つめ続けていました。

朝焼けの空が広がる頃、男は家に戻ってきました。しばらく開けていなかったポストから、一枚の葉書がひらりと足元に落ちました。「部長、お元気ですか？ ご無沙汰して申し訳ありません。部長が退職されてからも、僕らは気張っています！ このたび新人とのチームで……」男は葉書を拾い上げ、声を震わせました。「もう、私は部長ではないんだがな……」男は真っ赤になった目を、手の甲でこすりました。その顔には穏やかな笑みが浮かんでいました。(おわり)

次回11月15日に掲載

小原麻由美 1969年、名古屋生まれ。保育士を経て児童文学作家に代表作『ありがとうの道』(PHP研究所)、『キユンすけのおくりも』(三恵社)がある。
小島加奈子 1969年、愛知県大府市生まれ。北海道由仁町在住。画家、イラストレーター。93年、愛知県立芸術大学大学院修了。北の自然と寄り添い暮らす。